

■ 書 評



注意と意欲の神経機構

日本高次脳機能障害学会
教育・研修委員会 編
新興医学出版社
2014年10月 280頁
本体価格 4,200円+税

本書は、注意と意欲という、精神活動の中核に位置し、多くの精神疾患でその障害が問題となる対象について、神経心理学的あるいは症候論的な基礎、および症状形成にかかわる神経機構についてわかりやすく解説されている労作である。「はじめに」で述べられているように、本書の編著者は、①精神活動のうち、注意と意欲の側面に限定する、かつ、②明確な脳損傷に起因する病態に関心領域を設定する、という限界設定を行っている。そのため、編者が想定する読者層の中心は一般精神科医ではないかもしれない。実際、神経認知機能や大脳皮質各領域の機能などに馴染みの薄い読者は、注意機能の評価法の妥当性検証や個別の神経機構がかかわる意義など、いくつかの論考について理解の難しさを感じるだろう。しかし、そうした技術的な困難をあまり気にせず全体を読み進めれば、注意と意欲の概念やその神経機構に関する新たな視点を獲得できるように思う。その上、概念や理論だけにとどまらず、注意や意欲障害の治療・リハビリテーションについても、具体的な手法について、ポイントを強調する形で解説されているため、本筋が理解しやすい。また、多くの節で丁寧な症例提示が行われていることも具体的な理解を助けてくれる。さらに、臨床症候群の原典から最新の知見に至る有用な引用論文は、基本的な概念とその変遷や最新の脳機能画像の知見などに関する理解を深めるのにとても役立つ。タイトルにある神経機構に関する記述は、全般に紙幅の関係もあってか、やや天下り式だが、詳細に関心のある読者は引用論文を参照すればよい。

本書の構成は、以下の通りである：

第Ⅰ章 注意・意欲の捉え方

第Ⅱ章 注意障害・意欲障害の臨床

第Ⅲ章 トピックス

第Ⅳ章 治療

第ⅠおよびⅢ章では注意や意欲に関する新しい捉え方が紹介されている。注意については、その機能的コンポーネントに関するモデルが提示され、神経表象の活性化・賦活に影響する感度の調節メカニズム、競合的選択過程などの概念がワーキングメモリと相俟って、注意のトップダウン制御を構成するという。注意とワーキングメモリという異なる概念でくられてきた活動が互いに密接な関連をもつ可能性は、実際の脳機能を考えると自然なことかもしれない。最近、注意障害を説明する機序との関連が注目されているデフォルトモードネットワークとその抑制障害に関する最新の知見も興味深い。また、意欲については、「自発性の低下」に関する概念の変遷が「アパシー」に収束しつつあり、また、高次脳機能障害としての自発性低下には、少なくとも3つの異なる神経ネットワーク（①背外側前頭前皮質回路、②眼窩前頭皮質回路、③前部帯状回回路）が関係することが教示される。脳損傷の病態に関する神経機構モデルを、内因性疾患に安易に援用すべきではなく、まずは異なる病態の差異を考える必要があるが、例えば統合失調症の無為の問題を考えるきっかけにはなるように感じられた。

第Ⅱ章では、精神科医が対応を求められる可能性があるアパシーや脱抑制に関する問題が取り上げられている。特にアパシーに関する論考では、抑うつ状態との鑑別がしばしば問題になるが、異なる情動の側面の問題として整理されている。脱抑制では眼窩前頭前皮質の損傷が重視され、感覚情報の統合、強化子の感情価の脳内表現、意思決定や期待などの障害がその表現型と関係する可能性が示唆されている。

第Ⅳ章では、特にアパシーのリハビリテーションにおいて、心理学の理論に基づきながら、動機づけや状態に応じた欲求の充足を図ることが強調されている。こうした指摘は、統合失調症の認知リハビリテーションにも通じる。

本書は、「注意と意欲」に関して、コンパクトだが新鮮かつ深い知見を提供するモノグラフであり、精神科医の日常臨床に役立つだけでなく、精神疾患全般に対する新たな視点の拠所となりうる。

(兼子幸一)